

1. 金輪塔 1基

金輪塔は高野町高野山 689 番地、高野山の中で一心院谷と称される地域に所在する多宝塔である。高野山の中興に尽力した明算大徳（1021～1106）が自らの廟所として建設した。本尊は金輪仏頂尊で金輪塔の名の由来となる。江戸時代後期に火災により類焼し、天保5年（1834）に再建されたものである。国宝（建造物）金剛峯寺不動堂は明治41年（1908）に高野山壇上伽藍に移築されたが、移築前はこの不動堂と対をなす多宝塔であった。現在は宗教法人金剛峯寺が所有し管理されている。

三間多宝塔、檜皮葺屋根で、東面して建つ。割石で囲んで亀腹を造り、礎石を据える。下層は一室に造り、四周に勾欄付きの縁を回し、正面に階段を設ける。身舎柱を丸柱の四天柱とし、周囲の庇柱を角柱とする。四天柱の背面寄りには来迎壁を造り須弥壇を構え、漆塗りで仕上げる。室内は板張りの床で、天井は格天井とする。柱間は正面、側面の中央間を棧唐戸に明障子とし、脇間は連子窓に造る。背面は片引板戸に明障子、脇間は板壁とする。下層組物は出組として軒桁を支える。軒は二軒繁垂木とし、隅木には風鐸を吊る。

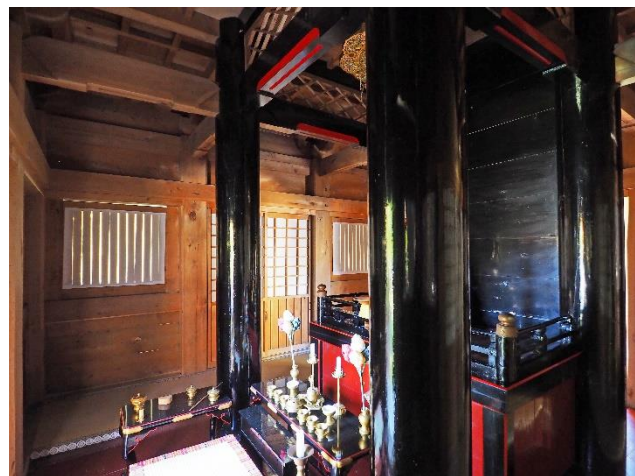
上層は下層屋根上の亀腹上に造る。亀腹は銅板葺とする。上層平面は丸柱による円形平面とし、周囲に勾欄付きの縁を回す。長押を回し柱間は板扉と連子窓に造る。組物は四手先組物とし、軒は二軒繁垂木、隅木には風鐸を吊る。

屋根は下層、上層ともに檜皮葺で上層には露盤を据え、相輪を掲げる。相輪の上部からは屋根の四隅に宝鎖を下げる。

金輪塔は天保5年に建設された総間が5mあまりの比較的規模の大きな多宝塔である。軒の出は深くとられるが、上層の屋根勾配は強くされ、時代の特徴が現れている。明治時代に不動堂は移築されたが、金輪塔はそのままの位置で維持された。不動堂と共に、境内の象徴となる重要な存在であった。県内に残る数少ない江戸時代後期建設の三間多宝塔として貴重である。



金輪塔 外観



金輪塔 内部

2. ^{にょにんどう}女人堂 1棟

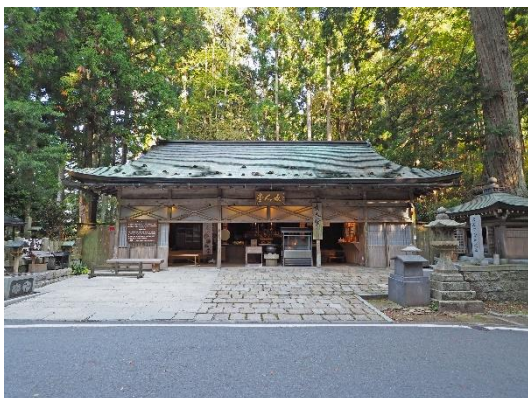
女人堂は高野町高野山 709 番地に所在し、江戸時代まで女性の高野山参詣者が宿泊した建造物である。明治5年(1872)までは高野山は女人禁制であり、女性は高野山外周を囲むように巡る女人道から参拝し、高野七口の各口に女人堂が設けられた。このたび指定する女人堂は、高野七口のうち不動坂口に位置し、現存する唯一の女人堂である。宗教学法人金剛峯寺が所有し管理・公開されている。

建設年代は不明であるが、室町時代後期の部材を一部使用して江戸時代前期に再建されたと考えられる。江戸時代末期に内陣を拡張し、大正4年(1915)高野山開創1100年記念大法会にあたり地盤を掘り下げ3mほど下に移設され、この際正面側内部の床が撤去された。昭和58年(1983)に檜皮葺から銅板葺に改められた。

女人堂は、間口11.9m、奥行7.1m、入母屋造、銅板葺で、西面して建つ。現状は正面側を土間、背面側に床を造る。背面側は中央間を内陣とし、脇間は前後に間仕切り小部屋を設ける。柱は角柱に造り、組物は正背面を除き舟肘木とする。軒は一軒疎垂木で、化粧木舞を打つ。屋根の妻飾は木連格子に造る。

各期にわたって改造がなされてきた堂であるが、小屋組は当初形式を良く留めている。この小屋組に残る痕跡より当初の柱位置や天井形式が明らかである。建設当初は正面側に吹き放しの縁側を設け、背面側中央間を仏間とするほかはコ字形の広い一室に造られていた。

女人堂は高野山不動坂口に、江戸時代前期に建設されたとみられる住宅風の仏堂である。明治5年まで女人禁制であった高野山参詣の信仰形態を伝える、現存唯一の建造物となる。建設後の改修は多く見られるものの構造材は当初の部材を良く残しており、近世、近代を通じて継承されてきた女人堂の変遷を知ることが出来る貴重な文化財である。



女人堂 外観



女人堂 内部

3. 彩絵檜扇 さいえひおうぎ 1握 あく

彩絵檜扇は、明徳元年（1390）、足利義満を中心として天皇・上皇らによって熊野速玉大社に奉獻された1,000点以上にのぼる古神宝のうち、明治中期に社外に流出した2握の檜扇の一つである。現在、国宝に指定される速玉大社所蔵の「古神宝類」中の10握、京都国立博物館所蔵の「古神宝類（阿須賀神社伝来）」中の1握とともに、熊野十二所権現及び速玉大社の撰社である阿須賀神社の神々のために制作されたものと考えられる。近年、新宮出身の文筆家・佐藤春夫の子孫により再び速玉大社に奉納された。

彩絵檜扇は、縦39.4cmのヒノキ材計27枚からなる。素地に彩色を施し、上端に穴を各3点ずつ空け、白糸（後補）で綴じる。要はこよりを石畳結びとする。片面にはフジバカマとススキを、もう片面には松と竹とを画面左から右に向かって大きく配置する。輪郭線を引かずに白、墨、緑、朱、紫（か）の彩色で描き表す。余白には金銀箔や砂子をふんだんに散らす。一部に短い亀裂が入るほかは健全で、特に黒変しやすい銀箔が今なお非常に鮮やかな白銀色を呈しているなど、彩色の状態は極めて良好である。

速玉・阿須賀の国宝「古神宝類」中の檜扇群と、法量・形態・構図・賦彩の方法などが一致することから、従来より一具の作と考えられてきた。この度実施した光学調査により、使用顔料が両者の間で共通することが確認され、伝来についても、近年、佐藤春夫の父豊太郎の書簡の調査研究により、明治期の流出から再奉納までの経緯が概ね判明したことで、両者の一具性がより確実なものとなった。

作行きにおいても速玉・阿須賀の国宝「古神宝類」中の檜扇群と比較して遜色はなく、むしろ全体の中でも丁寧な出来栄を示すといえる。また、現存する他の作例と比較すると、本作は平安時代から江戸時代にかけての檜扇の大型化・装飾化の過渡期を示すものと位置付けることができる。

以上のことから、彩絵檜扇は、明徳元年に足利義満らによって奉納された現存最大規模を誇る熊野速玉大社の国宝「古神宝類」中の檜扇群と一具の作である可能性が極めて高いと判断され、数少ない中世檜扇の優品として価値が高く、和歌山県指定文化財〔有形文化財（工芸品）〕に指定して保護を図るものである。



彩絵檜扇

4. ほそかわ かさほこまつりかんれんようぐ 細川の傘鉾祭関連用具 5点

細川の傘鉾祭関連用具は、伊都郡高野町細川の氏神である八坂神社の細川の傘鉾祭において使用されてきた用具で、鬼面、面箱、傘鉾幕、幕箱、傘鉾柄から構成される。祭礼は毎年8月16日に催行され、雨乞いや厄除けの祭りといわれ、傘鉾と笹を持った鬼によって行われる。

鬼面は、細川の傘鉾祭の主となる鬼役がかぶる面しゅで、面長 24.2 cm、面幅 19.3 cm、面奥 10.3 cm。頭上両側に二股の角を生やし、こぶ状の突起をあらわした大きな眉と大きな目、先がとがった鼻には長い鼻孔があらわされ、口には長い牙が上下左右に4本、歯を上下4本ずつあらわしている。広葉樹の一材製で、下顎は、破損し、紐でつないでいる。鬼面が納められた面箱には宝暦5年(1755)の墨書が確認できるものの、鬼面の特徴から製作時期は室町時代まで遡る可能性がある。

傘鉾幕は、縦 140 cm、横 577.4 cmに及ぶ。幕には宝珠を抱えた海女と海女を追う龍を描く。本体は大麻で編まれ、藍で染められた18枚の生地がつなぎ合わされている。幕に描かれる龍と海女は、染織ではなく、顔料によって彩色されたもので、彩色部は、製作当時から大きく変わっていないとみられる。県内に残存する傘鉾幕にはこのような作図が施されたものは確認できておらず県内で唯一の傘鉾幕である。幕箱から享和3年(1803)に八坂神社へ伝来したことを示す。

傘鉾柄は、長さ 250 cm、広げると直径 200 cmになる。構造としては、芯棒と骨、骨と連結する2つのロクロからなる。柄の上部にはロクロが滑り下りないように棒を挿す穴が開けられている。柄の墨書から文久3年(1863)に奉納されたことがわかる資料である。

細川の傘鉾祭関連用具は、祭礼の中心となる主要な用具が全て残り、いずれの資料も製作年代の根拠を示す資料が揃っている点が特色としてあげられる。また、本資料は、旧来の所作を残しながら現在まで維持してきた細川の傘鉾祭の中心的な役割を果たす祭具であるとともに、高野山麓で風流芸能の有り様を示す貴重な資料であり、学術上の価値が高い。



鬼面と鬼面箱



傘鉾幕